

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770182

研究課題名(和文) 留学生の日本語学習動機の長期的発達：ダイナミックシステムズアプローチの観点から

研究課題名(英文) Long-term change in international students' motivation for learning Japanese:
Dynamic systems approach perspective

研究代表者

小林 明子 (KOBAYASHI, Akiko)

島根県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：40548195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ダイナミック・システムズ・アプローチの手法を参考としながら、日本語学習に対する動機づけの長期的変化を探ることであった。調査では、日本の大学に在籍する留学生、および卒業後、日系企業に就職した元留学生を対象として半構造化インタビューを実施し、日本語学習に対する動機づけの変化と変化の時期、影響要因を分析した。さらに、動機づけを高めることを目的とした授業実践を行った。結果として、日本語学習開始時から大学4年間、就職後までにおいて動機づけの在り方と影響要因が変化することが示された。これにより、各教育段階において求められる学習支援や教育プログラムの内容が異なることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the long-term change in motivation for learning Japanese using the dynamic systems approach. In the survey, semi-structured interviews were first conducted for international students enrolled in Japanese universities and former international students who secured jobs at Japanese companies after their graduation. Second, the responses to the interview questions were analyzed based on the following aspects: changes in motivation for learning Japanese, timing of the change, and factors influencing the motivation. Further, classroom practices, aimed at increasing the motivation, were conducted. As a result, it was shown that students' motivation levels, as well as the factors influencing the motivation levels, change from those at the beginning of Japanese learning to those after securing a job. It was revealed that different learning support and Japanese educational program were required at each educational stage.

研究分野：日本語教育

キーワード：動機づけ 異文化接触 中国人留学生

1. 研究開始当初の背景

近年、留学経験を活かして日系企業に就職する留学生が増加している。これに伴い、従来から行われてきた日常生活や学術のための日本語教育に加えて、ビジネス日本語教育や就職支援が盛んになっている。つまり、大学入学時から就職時期まで大学4年間という長いスパンでの日本語支援が必要となっているのである。このような長期的な視野で留学生の日本語学習に対する支援を考える際、どのような時期にどのような支援が必要とされるのだろうか。また、留学生自身は、大学4年間を通じてどのように日本語学習に動機づけられていくのだろうか。

高校時代から大学時代は、職業を選択して社会人になる準備をする青年期に当たり、大学生の学習には将来像や職業像が大きな影響を与えることが指摘されている(速水, 1998)。留学生の場合、第二言語である日本語を用いて、自分が「こうありたい」と考える将来像を展望していく必要がある。また異文化社会である日本で将来像を形成していく際には、日本人、社会との異文化接触が日本語学習に対する動機づけに影響を与えることが指摘されている(河先, 2006; 小林, 2014)。しかし、自らを取り巻く異文化コミュニティに対し、留学生がどのような参加過程をたどり、文化摩擦や対立をどのように解釈してその後の日本語学習に動機づけられていくのか、彼らが置かれた学習・教育環境の影響を包括的に検討した調査は十分ではない。

動機づけは常に揺れ動いており、社会状況、周囲の人々や学習経験など数多くの要因から影響を受けて、向上、低下を繰り返す複雑で動的なシステムである(Dörnyei et al., 2015)。動機づけを様々な要因が互いに影響しあい、時間の経過とともに複雑に変化するものと捉える手法のひとつとして、ダイナミック・システムズ・アプローチ(Dynamic systems approach: DSA)がある。DSAでは、動機づけの変化・発達のプロセスを時間軸に沿って詳細に記述し、それまでには見られなかった動機づけの種類や変化を考察し、その変化はどのように起こったのか、変化を起こした要因は何か、どのようなとき、その変化は起きるのかなどを明らかにする(廣森, 2014; 馬場・新多, 2016)。

本研究では、DSAの手法を参考としながら、留学直後から卒業時期までの各教育段階において求められる日本語学習支援の内容を明らかにすることを目的とする。動機づけの変化・発達のプロセスや影響要因を詳細に検討することにより、留学環境、日本語教育プログラムの改善のための実証的なデータを得ることが可能となると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学入学時から進路決定、就業時期を通して留学生の日本語学習に対

する動機づけがどのように変化するか、変化の過程と時期、影響要因を明らかにすることである。これにより、大学における各教育段階において求められる日本語学習支援の内容や教育環境の整備を検討する。

3. 研究の方法

本研究は以下の方法により実施した。

(1) 第二言語教育及び日本語教育における動機づけ研究を概観し、研究動向をまとめたうえで本研究の研究課題を示した。

(2) 日本の大学(大学院)を卒業(修了)後、日系企業に就職した元留学生を対象に、半構造化インタビューを実施し、日本語学習開始時から会社に就職後までの動機づけの変化と影響要因を探った。

(3) 日本の大学(大学院)に在籍する中国人留学生を対象に定期的に半構造化インタビューを実施し、日本語学習に対する動機づけの変化と影響要因を縦断的に調査した。

(4) 学習者の動機づけを高めることを目的とした授業実践を行い、どのような変化が見られるか考察した。

4. 研究成果

(1) 関連する分野の文献を整理し、日本語学習者の動機づけの変化・発達過程と影響要因についての知見をまとめた。動機づけを理解するための理論は数多くあるが、本研究では、動機づけを捉える際に、学習者が持つ将来像とその学習者を取り巻く社会的・文化的文脈とを統合して研究するための枠組みとして、L2 Motivational Self System(Dörnyei & Ushioda, 2009)を用いた。第二言語学習者は、「こうなりたい、こうありたい自分」という「第二言語の理想自己(Ideal L2 Self)」とともに、親や社会から期待される「第二言語の義務自己(Ought-to L2 Self)」を抱いており、学習者の学習行動には両方の動機づけが影響を与えている。さらに、教員や教育カリキュラム、成功経験などの「第二言語学習経験(L2 learning experience)」がこれらの動機づけに影響を与える。

これまでの調査から、日本で学ぶ中国人留学生の場合は、進路決定の過程において形成される将来像が、大学における日本語学習に影響を与えること、将来像を伴った動機づけが形成される過程では日本人、社会との相互作用が果たす役割が大きいことが示されている(河先, 2006; 小林, 2014)。特に、大学や地域の一員として一定の役割を果たし、周囲の日本人から認められた経験がきっかけとなり、日本企業というより大きな異文化コミュニティへ参入する将来像を描きやすくなることが示唆されている(小林, 2014)。

しかし、このような全体的な傾向に加えて、動機づけの段階的な発達を明らかにするためには、時間経過の観点を含めて動機づけの連続的な発達過程や影響要因の変化を分析する必要がある。この課題に対して近年、ダ

イナミック・システムズ・アプローチ (Dynamic systems approach: DSA) に基づく研究が注目されている。DSA は第二言語能力や動機づけの変化・発達を捉える枠組みであり、その基本的手法は、個々人の多様な発達軌跡を記述し、発達の変化点を特定し、変化に強い影響を与える要因を特定する、というものである。さらに、得られた結果をともに、影響要因を意図的に取り入れた教育介入を行い、それが本当に変化・発達に影響を与えるのか検証することも可能となる(廣森, 2014; 馬場・新多, 2016)。

DSA は、動機づけの変化・発達と学習・教育環境との関係を明らかにする手法として、第二言語教育に取り入れられつつある。一方、日本語教育における動機づけ研究に関しては、これまでに、動機づけの構造を明らかにする研究、動機づけと他の要因との関連を調査した研究、動機づけの変化と影響要因を調査した研究、動機づけを高めるための教育実践的研究、といった多様な研究が進められつつある。しかしながら、学習者の個人差要因を動的、相互作用的に捉え、時間軸を取り入れた長期的な視野から分析する研究は不足している(村上, 2010)。今後は DSA の手法等を参考にしながら、動機づけの長期的な変化の過程と影響要因を調査する研究を進めることが必要となる。

(2) 日本の大学(大学院)を卒業(修了)後、日系企業に就職した中国人留学生3名を対象に半構造化インタビューを実施した。インタビューは、大学在学中の3・4年次(大学院修士課程)から、就職後まで複数回実施した。主な質問項目は、日本語学習を始めた理由とその後の動機づけの変化、留学を決めた理由、留学前後の日本・日本社会との接触経験、将来の進路を決めた理由、現在の仕事内容と将来の展望、大学在学中の学習や経験で就職後に役立ったこと等であった。インタビューデータは録音し、その後すべて文字化した。

分析では時間経過のなかでの動機づけの変化・発達の経路を捉える手法として、複線径路等至性アプローチ(安田・サトウ, 2012)を用いた。分析では、各調査協力者の個別的な動機づけの変化・発達の経路を時期別に分析し、時期によってどのような動機づけが現れるのか、またどのような影響要因が見られるのかを検討した。具体的には、動機づけの変化を4つの期間に分けて考察した。第1期は日本語学習を開始した中学・高校時代、第2期は日本の大学への留学当初から進路決定まで、第3期は進路決定時期、第4期は就職後である。次に、動機づけの変化・発達の経路と影響要因の共通点、相違点を考察した。

結果として、調査協力者の動機づけの変化・発達の経路には多くの共通点が見られた。第1期(中学・高校時代)における日本語学習や進路の選択には、親や教師の助言、中国

の社会状況(受験競争、就職難、留学ブーム)の影響が大きく、周囲から期待される「第二言語の義務自己」が強く意識されていた。その一方、日本人との接触は少なく、アニメや漫画などに限られており、現実の日本語使用を想定した「第二言語の理想自己」を想像するのは難しい状況にあった。

続いて第1期(留学当初～進路決定)は、日本の大学に留学し、日本人大学生や地域住民との接触が増えていく時期である。来日当初は、全員、日本語が聞き取れない、日本人と話が通じないという困難を感じているが、積極的に日本人のコミュニティ(寮、サークル、ゼミ、アルバイト等)に参加することによってそれを克服しようとしている。この時期には漠然とした将来像、職業像を持っているものの、「第二言語の理想自己」はあまり明確なものではなかった。その一方、日本語の上達や自己表現の楽しさを感じることで、動機づけが向上する様子が見られた。

第2期(進路決定時期)になり、学年が進むとサークルやアルバイト先で責任ある仕事を任されるようになり、日本人のコミュニティにおいて一定の役割を果たすようになる。これにより、将来日本語を使って日本人と働く自信を得たという協力者も見られた。また、進路の決定時期にあたるため、留学経験や得た語学力を活かしたいという「第二言語の理想自己」を構想していく。それと同時に将来、中国に帰国した際を見据えた親や周囲からの助言を聞くことで「第二言語の義務自己」も意識している。調査協力者の進路選択や日本語学習に対する意識には、これら2つの動機づけが影響を与えていた。

第3期(就職後)は、将来のキャリアのために、職場で求められる語学力や専門スキルをさらに伸ばそうとした時期である。顧客や職場から求められる日本語能力という意味では「第二言語の義務自己」ともいえるが、調査協力者自身も社会から求められる能力に積極的にこたえ、成長していこうとしているという点で、「第二言語の理想自己」と「第二言語の義務自己」のバランスが取れた状態であることがうかがえた。また、就職後に振り返って大学時代に役立った経験として全員が挙げたのが日本人コミュニティでの経験であった。日本人との人間関係の作り方や日本式の自己主張の仕方などを学んだことが就職後に役立ったと述べている。

これらの結果から、大学入学当初から就職活動前までの時期に見られた異文化接触経験がその後の将来像やキャリア形成、日本語学習に対する取り組みにまで影響を与える可能性が示唆された。ただし、留学当初と進路決定時期では、動機づけの在り方や影響要因が異なるため、教師の働きかけや準備すべき学習プログラムを変えていく必要があることも示された。特に「第二言語の理想自己」に影響する要因は時期によって違いが見られた。また、日本語での意思疎通や日本人と

の人間関係構築が難しい等の困難が必ずしも動機づけの低下を招くわけではなく、その異文化接触を調査協力者自身がどのように解釈するのが、「第二言語の理想自己」の形成に影響を与えていることが示唆された。

(3) 日本の大学(大学院)に在籍する中国人留学生を対象としてインタビューを実施し、日本語学習に対する動機づけの変化と影響要因を調査した。全33名から協力を得たが、ここでは、大学1年次の中国人留学生2名(調査協力者A・B)に対して、大学入学時から1年間、3-4か月ごとに実施した半構造化インタビューの結果を報告する。得られたデータはすべて文字化し、時系列に分析して時期ごとにどのような動機づけが出現するか、動機づけの変化と影響要因の個人差を探った。分析においては、複線径路等至性アプローチ(安田・サトウ, 2012)を用いた。まず、各調査協力者の個別的な動機づけの変化・発達の経路を時期別に分析し、時期によってどのような動機づけが現れるのか、どのような影響要因が見られるのかを検討した。調査協力者の動機づけの変化を3つの時期に分けて分析した。第1期は日本留学前(中学・高校時代)、第2期は留学当初(1学期目)、第3期は2学期目である。各時期において出現する動機づけと影響要因を考察した。

結果として、2名の動機づけの変化には以下のような共通点と相違点が見られた。まず、第1期には、調査協力者2名とも高校の成績や中国での大学受験が最も強い動機づけとなっていた。また、良い成績を取ることが親や教師周囲から期待される「第二言語の義務自己」と一致しており、調査協力者自身にとっても、学習の楽しさにつながっていた。次に第2期では、調査協力者の日本人との接触の程度によって動機づけに相違が見られた。調査協力者Aの場合は、日本人大学生との友人関係の構築方法が分からないことやアルバイトを申し込んでも断られる経験などが自己の日本語能力を低く評価することにつながっていた。これにより、同国人の留学生と過ごす機会が増え、さらに日本語使用の機会を自ら失う様子が窺えた。調査協力者Bの場合は、混合寮やゼミ、アルバイト等を通して日本人との友人関係を深めたことが日本語の上達感や学習の楽しさにつながっていた。続いて第3期になり、1年次後期になると、調査協力者ABともに動機づけが低下する様子が見られるようになった。両名とも、この時期には、曖昧な将来像しか有しておらず、進路についても中国の親の意見から形成される「第二言語の義務自己」のほうが明確に見られた。また、日常生活において同国人と過ごすことが多い場合、日本語が上達しなくても生活上の不便を感じないため、積極的な学習に結び付かない場合も見られた。これらのことから、明確な将来目標をもたない留学生を送ることによって日本語学習に対

する意義づけが曖昧となり、動機づけが低下する可能性が示唆された。

これらの結果から、時期によって動機づけに対する働きかけを変える必要があることが示唆された。まず来日当初には、日本語母語話者との接触機会を多く設けることによって、日本語使用に対する不安を軽減し、自信を高める取り組みが必要といえる。これにより、将来「第二言語の理想自己」を構想していくための自信を育成していく必要がある。さらに留学後の早い段階で、日本語学習に対する長期的な動機づけを明確にし、留学生活の過ごし方や日本語学習の意味づけを意識化する必要があることも示唆された。

(4) 学習者の動機づけを高めることを目的とした授業実践を行い、授業前後にどのような変化が見られたのかを考察した。これにより、学習者の将来像(「第二言語の理想自己」「第二言語の義務自己」)を明確にするとともに、現在の日本語学習や留学生活の過ごし方について見直すことを目的とした。授業は1学期間(90分×15回)の間、実施した。コース全体を通して、若者を取り巻く雇用や就職の状況について知り(「第二言語の義務自己」)、将来の職業像を明確にする(「第二言語の理想自己」)ことを目的とした。同時に、テーマに関わる語彙、表現を学ぶ、関連する読み物を読む、発表やレポート作成をするなどの活動を通して総合的な日本語能力を高めることを目指した。具体的なコースの流れについては、岡崎(2009)を参考に以下のように実施した。世界の若者の雇用状況とその背景について知る、自分の国の若者の雇用の現状、自分が考えた事を説明する、日本における留学生の就職活動、日本語を使う仕事について知る、自分が就きたい職業を調べて、雇用状況やその仕事に就く方法を発表する、将来のために、今できることは何かを考える。授業の前後において学習者の動機づけにどのような相違が見られるか質問紙により調査した。さらに、分析の際には学習者が提出したレポート、発表資料、教師が記した授業記録等を補助的に用いた。

結果として、質問紙の分析結果から、「第二言語の理想自己」については授業前後の得点差は有意ではなかった。「第二言語の義務自己」については、授業後の方が有意に高い得点を示した。したがって、自らが考える将来像に関しては授業前後に大きな変化は見られなかったものの、社会や周囲の人々から期待される将来像については、授業後のほうがより強く意識するようになっていたことが示された。さらに、授業前のレポートと最終発表の内容も分析した。質問紙調査の結果からは大きな相違が見られなかったものの、学習者の「第二言語の理想自己」は、授業後のほうがより具体的になっていた。特に就職時期に近い3年生に関しては、将来の日本での就職も視野に入れて仕事内容や就職活動

の方法を具体的に調べているが見られた。一方、「第二言語の義務自己」に関しては、授業後は、学習者全員が正社員を目指すべきだという結論に至っており、厳しい各国及び日本の雇用状況と自己の将来との関わりを強く意識するようになっていく様子が窺えた。授業を通して、雇用を取り巻く社会状況についてより深く理解し、自己の将来像として安定した雇用を求める気持ちが強くなったことが伺える。その一方、1年生の場合は「第二言語の理想自己」に対する意識に大きな変化が見られなかったことから、1学期間の取組みでは十分ではないことが示唆された。授業後半では、日本での留学生の就職状況や日本企業が求める能力について学んだり、日本語を使う職業例として国際交流員の体験談を聞いたりした。このような将来像を実現するための方法を学ぶ授業回について授業内容を深めていく必要がある。また、特に学年が低い学習者の場合は、短期間の働きかけに限らず、長期的な視野で将来像を考える機会を提供していく必要がある。

本研究の目的は、DSA の手法を参考としながら、日本の大学（大学院）に在籍する中国人留学生を対象に、日本語学習に対する動機づけの変化を探ることであった。結果として、日本語学習開始時から進路決定時期、就職後までの日本語学習に対する動機づけの変化を垣間見ることができた。これにより、留学直後から卒業、修了時期までの各教育段階において求められる日本語学習支援の内容が異なることが示唆された。まず、留学直後から大学1、2年次においては、日本人との接触経験を多く積み、日本語使用に対する不安を軽減して、日本語能力の上達を感じる経験をするのが重要であることが示された。留学当初に不安を抱くことによって、その後の交流に消極的になり、同国人と過ごす時間が多くなることによって、さらに自信を失うという悪循環に陥ってしまう留学生も見られた。しかし、同じように日本語での意思疎通や異文化交流の難しさを感じた場合でも、学習者がその困難をどのように捉えるかによって、動機づけが向上する場合と低下する場合が見られた。したがって、学習者が留学中の異文化接触をその後のキャリア形成や日本語学習に主体的に生かすためには、その体験を意味づけし、自分なりに再解釈する場や支援が必要であることが示された。また、学年が進み、日本人のコミュニティのなかで一定の役割を積む経験をすることで、将来日本語を使って活躍する自己をイメージすることが可能となることが示唆された。しかし、日本語力の不足や外国人であることが理由となって、ゼミやアルバイト先等で責任ある立場を任せられない場合も見られた。また、留学当初の異文化接触に対する自信の喪失が原因となってコミュニティでの役割を果たそうとしない留学生も存在した。したがって、

日本人と留学生が協働的に働く異文化コミュニティを意図的に大学内に創り出す重要性も改めて示唆された。このように、学習者の学年に応じて段階的に日本語教育プログラムを準備していく必要がある。

今後は、上記のような知見をもとにした授業での教育的介入が課題となる。調査で見出された動機づけに対する影響要因を意図的に取り入れた授業実践を行い、その要因が本当に動機づけを高めるのかどうか検証することが必要となる。本研究の場合で言えば、将来の日本語使用状況を想定した異文化コミュニティを教室内に創り出すことや異文化間の協働学習を促すことにより、動機づけを高める取り組みが必要である。近年の日本語教育における動機づけ研究では、特定のタスクや活動のなかでどのように動機づけが変化するか調べる調査が見られるようになっていく。しかし、授業実践の前後の動機づけの変化を調査するだけでなく、実践の途中の教育・学習環境との相互作用がどのような変化を生み出すのか、教師にはどのような役割が求められるのか、より詳細に調査する研究を進めていく必要がある。

<引用文献>

- 岡崎敏雄(2009)『言語生態学と言語教育 人間の存在を支えるものとしての言語』凡人社。
- 河先俊子(2006)「中国・韓国からの私費留学生の日本語学習動機についての調査 - インタビュー調査による - 」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』29, pp.68-92.
- 小林明子(2014)「中国人留学生の日本語学習に対する動機づけの形成過程 日本における将来像との関連から」『異文化間教育』40, pp.97-111.
- 速水敏彦(1998)『自己形成の心理 自律的動機づけ』金子書房。
- 馬場今日子・新多了(2016)『はじめての第二言語習得論講義 - 英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店。
- 廣森友人(2014)「ダイナミックシステム理論に基づいた新しい動機づけ研究の可能性」『The Language Teacher』38, pp.15-18.
- 村上京子(2010)「日本語教育における実証的研究 研究方法と個人差について」『日本語教育』146号, pp.90-101.
- 安田裕子・サトウタツヤ編著(2012)『TEMでわかる人生の経路 質的研究の新展開』誠信書房。
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (Eds.). (2009). *Motivation, language identity and the L2 self*. Bristol: Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z., MacIntyre, P. D. & Henry, A. (Eds.). (2015). *Motivational dynamics in language learning*. Bristol: Multilingual Matters.

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

小林明子・千葉朋美、中国の大学で学ぶ日本語学習者の動機づけに関する研究、JALT 日本語教育論集、査読有、14号、2017、印刷中

小林明子、留学生の日本語学習動機の長期的発達 ダイナミックシステムズアプローチの観点から 平成26年～平成28年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書、査読無、2017、pp.1-20

[学会発表](計2件)

Kobayashi, A. Changes in L2 selves through career development. 42nd Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition, November, 26, 2016. Aichi Industry & Labor Center, Nagoya, Japan.

Kobayashi, A. How young Chinese students develop their careers and L2 selves through cross-cultural experiences in Japan: Life stories of Japanese learners. Hawaii International Conference on Education 2016, January 5, 2016. Hilton Waikiki Beach Hotel, Honolulu, Hawaii.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小林 明子 (KOBAYASHI, Akiko)

鳥根県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：4 0 5 4 8 1 9 5